

ご注文は鬼殺隊の虹柱ですか？

ひし形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、友達とお墓参りに行って帰ってきたらその道場の師範と娘は殺されていた。その娘の人は友達の婚約者だったため殺したと思われる道場の所に友達は行くこうとしてたので止めようとしたが止められなかった。そのまま友達その道場に行った。その後、その友達がその道場の66人たちを殺したこと、そして鬼に変えられてしまった事を聞き、鬼殺隊に入り、虹の呼吸オリジナルの呼吸を生み出し、そして柱にもなったが現在まで鬼になった友達とは一回も会えなかったが、途方に暮れているなか一人の人物と出会って家を紹介してもらい、その紹介してもらった家の人たちと暮らしながら鬼をこの世から抹殺し、鬼になった友達を救って、平和な日常を取り戻そうとする物語

目次

第1話	木組みの家と石畳の街	1
第2話	ひと目で尋常でないもふもふだと見抜いたよ	3

第1話

木組みの家と石畳の街

ココア「お兄ちゃん！見えてきたよ！」

大輝「ああ、そうだな」

俺の名前は大輝、そして今話しかけて来たのが妹のココアだ。妹と言っているが実は本当の兄妹ではない。なぜお兄ちゃんと言われるようになったかという俺はココアが小さい時から家にいたので自然にお兄ちゃんと呼ばれるようになった。元々は今から行く下宿先にいたのだがその家のサキさんという人にココアの家の母親と友達だったのでそこで面倒をみてくれるという風になったのだが俺がココアの家に行くときサキさんの娘のチノちゃんという子がいるのだが俺の袖を引っ張りながら行っちゃダメ！と言っていたのは今でも覚えている。本人は覚えているかは分からないがまあ久々に会えるから俺はとても楽しみにしている。後、俺は鬼殺隊という所に所属している。鬼殺隊とは鬼に脅かされている人たちを助ける組織だ。鬼とは夜にだけ行動し、主な食事は人間。だから俺たち鬼殺隊は市民の人たちが寝てる間に鬼に襲われない日々過ごすためにも一日でも早く鬼を倒さなければならぬ。ちなみに鬼を倒すためには頸を斬るか太陽の日を当てるかしかない、でも頸を斬るに普通の刀では斬れない。日輪刀という太陽の光を浴びた刀じゃなければ斬っても意味がない。そしてもう一つ鬼の頸は思っていたよりも硬い。普通の人では絶対に斬れないので鬼殺隊では全集中の呼吸というものを習っている

全集中の呼吸とは身体超活性の呼吸法と、そこから繰り出す剣術体系である。ちなみに呼吸の基本となる剣術の流派として炎・水・風・岩・雷の五系統が存在しており、他の流派はここから派生している。元々は、上記の五系統の名を関するただの剣術の流派に過ぎなかったのだが、始まりの剣士がそれぞれの流派を極めた当時の柱達に、彼らの適正毎に呼吸法を変えて指導した結果、剣技と呼吸法がセットになった全集中の呼吸という形になり、今現在まで受け継がれている。でも鬼殺隊は非公式の組織のため街で刀を持って歩いたりしてはい

けない。ちなみに俺は鬼と人間の子だ。鬼と言っているがこの時代にいる鬼の事ではない。でも体質は鬼と似ているのでもう何百年も生きている。振り出しに戻るがなぜ下宿先に向かうことになったかというところココアが通う高校がその街にあるため働くかわりに下宿させてもらうという話になった。俺がココアに付いてきてるのは心配だからである。

大輝「さあ、もう着いたから降りるぞ」

ココア「あっ！お兄ちゃん待ってよー！」

こうして俺たちは電車を降りた

第2話 ひと目で尋常でないもふもふだと見抜いたよ

ココア「わあ〜！懐かしい感じ！」

大輝「ああ、懐かしく感じる」

ココア「お兄ちゃんもこの街に来たことがあるの？」

そう聞かれると大輝は表情を少し暗くして

大輝「昔にな」

ココア「へえ〜、そうなんだ！」

大輝「それよりココア、下宿先の場所は分かるのか？」

ココア「地図があるから大丈夫だよ！」

大輝「俺が道覚えて「あつ！うさぎだよー！」つたく、相変わらずだなココアは」

大輝はそう言つてココアの声が聞こえる方へ歩いて行つた

ココア「もふもふー！」

ココアはそう言いながらうさぎを抱いていた

大輝「ここにいたのか」

ココア「あつ！お兄ちゃ・・・」

大輝「どうした？そんな顔して」

ココア「だって、なんでそんなにうさぎが乗ってるのー！」

大輝の両肩と頭にうさぎが一匹ずつ乗っており、合計で3匹いた

大輝「ああ、このうさぎか、こいつらはさつきココアを見つけて歩いていたら勝手に飛び乗って来たんだ、じゃあ、下宿先に向かうか」
そう言つて大輝はうさぎ達を放してあげた

ココア「うん！」

〜数十分後〜

大輝「着いたぞココア、ここがお前の下宿先だ」

ココア「ラビットハウス？って事はうさぎがいっぱいいるのかな
！」

大輝「いやただ看板にそう書いてるだけであつてうさぎがいっぱい

いる店じや「レッツゴー！」話を聞けよ」

そう言つて2人は中に入つて行つた

? 「いらつしやいませ」

ココア「うっさぎー!うっさぎー!」

大輝「こんにち「うさぎがない!」はあく」

? (なんだこの客)

大輝「とりあえず座ろうココア」

ココア「うん!」

そう言つて2人は椅子に座つた

ココア「そのもじやもじや」

? 「ティツピーです、一応うさぎです」

? 「それでご注文は?」

大輝「俺たち「じやあそのうさぎさん!」・・・」

? 「非売品です」

ココア「せめてもふもふだけさせて!」

? 「コーヒー1杯でいいですよ」

ココア「じやあ、3杯で!」

大輝「ごめんね、手間かけさせちやつて」

? 「いいえ、大丈夫です」

5分後

? 「お待たせしました」

ココア「じやあ、もふもふさせて!」

? 「早くコーヒーを飲んでください、冷めてしまいます」

ココア「じやあ、いただきます!」

そう言つてココアはコーヒーを飲んだ

ココア「この上品な味これはキリマンジャロだね!」

大輝「ブルーマウンテンな」

ココア「おっ!これはこれこそブルーマウンテンだね!」

大輝「いやそれがキリマンジャロだ」

ココア「そして最後はインスタント?」

大輝「オリジナルブレンドだ、誰が店でインスタントのコーヒーを

出すんだよ」

ココア「えへへ、じゃあコーヒー3杯飲んだから3回もふもふさせて！」

？「すぐに返してくださいよ」

ココア「おく、いい触り心地、あつ、いけないよだれが」

ティツピー「のおー！ー！ー！ー！」

大輝（今の声って）

ココア「今このうさぎ喋らなかつた？」

？「私の腹話術です」

大輝（さすがに無理があるだろう）

ココア「いや、このもふもふ感癖になるね」

ティツピー「ええい！離せ！この小娘が！」

ココア「なんかこのうさぎにダンディな声で拒絶されたんだけど！」

？「私の腹話術です」

ココア「いやでも今「私の腹話術です」そうなんだ！」

大輝（納得するんかい！）

大輝「あつ、そういうえば今日からここで下宿させてもらうんだけど聞いているかな？」

？「はい、話は聞いています、下宿させる代わりにうちを手伝ってくれと、ですがうちにはバイトの子もいますし手伝ってくれなくても大丈夫ですよ」

ココア「いらぬ子宣言されちやつた!?!」

大輝「まあ、そう言わずに手伝わせてくれないか？」

？「分かりました、あつ、遅れましたが私の名前はチノです」

大輝（そうか、こんなに大きくなったのか）

ココア「チノちゃんは今何年生なの？」

チノ「私は中学2年生です」

ココア「私のことお姉ちゃんって呼んで！」

チノ「じゃあ、ココアさん」

ココア「お姉ちゃんって」

チノ「ココアさん」

ココア「お姉ちゃんって「ココアさん仕事してください」任せて！」
そう言っつてチノちゃんとココアは俺とティツピーを置いてココアの制服がおいている更衣室へ向かって行った

大輝「ティツピーってマスターなんだろ？」

ティツピー「なぜ分かったんじや!？」

大輝「あんな思いつきり喋ったら分かるってましてや声も覚えてるんだから、というか何でティツピーに乗り移ってるんだ？」

ティツピー「あの世に招かれなかつたんじやろ儂は」

大輝「そんな事言うなつて、そういえばチノちゃん大きくなったな、もう中学2年生になるのか」

ティツピー「お主はあのココアという娘の家に行つて以来会つてないからの」

そんな会話をしていたらチノちゃんがおりにきた

チノ「おじいちゃんがまた口滑らせたんですね」

ティツピー「違う!こやつはチノとも儂とも知り合いじやから話してただけじや!」

チノ「私とも?」

ティツピー「そうじや、こやつ顔どこかで見覚えはないか?」

ティツピーがそう言うとチノちゃんは俺の顔をじつと見てきた

チノ「大輝さん…ですか?」

大輝「そうだよ」

と言つたらチノちゃんは俺に泣きながら抱きついてきた

大輝「そんなに泣くなつて可愛い顔が台無しになつちやうぞ」

と言いながら俺はチノちゃんの涙を拭きながら頭を撫でた

チノ「だつて…ぐすつ…また会えるつて…ぐすつ…思つてなくて」

大輝「約束しただろ、生きてる内に一回は絶対に会いに来るつて」
でなで

チノ「ぐすつ…はいっ!」

そう言いながらチノちゃんはしばらく静かな店の中で泣いていた